

* 高等教育フォーラムの中で言語と理性というテーマの議論があった。

私は次のように考えていました。

日本語で論理的に思考することが出来る。内容が論理的であれば表現するのになんら差し障りはない。日本語に欠陥があるのではなく、考えに欠陥があるのだ。

ところが、ふと次の疑問が生まれました。

自分はただいま論理的に日本語で論理的思考が出来る（とさせてください）が、自分はどうやって出来るようになったのだろうか？

少しばかり特殊な条件下だったから、手元には日本語しかなかったが、できるようになったのだろうか？ もしも、平穏平坦だったとしても知らないうちにひとりで論理的思考をするようになったのだろうか？

さらにつづく疑問です。

それが使われてさへいれば「ひとりでに」論理的思考をさせる言語があるか？ させるとまでではないが、させるのに「好都合な」言語はあるか？ 印欧語はそうか？ 主語、否定肯定を真っ先に言う動詞、冠詞、関係代名詞など、印欧語は日本語と違う。論理的思考を「自然発生させる」言語、あるいは「養うのに使う」道具としての言語として、日本語には弱点があるのか？

いまの私は日本語で何も不都合を感じませんが、もしも、同じ条件下に印欧語の子供として育っていたなら、もっと容易に、あるいはもっと多くの子供が論理的思考できるようになったのでしょうか？ ないしは、もっとゆるい条件下でも出来るようになったのでしょうか？ この素朴な疑問について言語学？、教育学、小児発達心理学、文学（谷崎潤一郎の試みはこの疑問に答えてはいませんか？）などは何を話しているのでしょうか？

1 日本語／印欧語の中へ投げ込まれた、先ほど生まれたばかりの赤子がこのさき論理思考することについて、日本語ならば一人もしないし、印欧語ならば全員がするのでしょ

うか？ “そうだ／そうではない／質問がナンセンス？”

2 人間は言語によって見え方が規定される一方で見え方によって言語を作ってきたと思うのですが、投げ込まれた言語に論理思考する使い勝手の良し悪しがあるので

しょうか？

“ある／ない／質問ナンセンス？”

3 人間の営為の長い歴史の中で言語は積み重ねられてきたので、言語に特有な観念をはらんだ世界の中に赤子は投げ出されるわけですから、言語の論理思考仕様に違いがあるとしても言語だけ抽出して（たとえば数学の数のように）使い勝手を考えることが出来るのでしょうか？ “できる／できない／質問ナンセンス？”

4 たとえ論理思考仕様の使い勝手が異なってもそのような言語を生み言語が生まれる人間歴史があったわけですから、仕様の如何にかかわらず論理思考する中に投げ込まなければ赤子は論理思考をするようにならず、投げ込まればするようになる、と言えるのでしょうか？ “言える／言えない／質問ナンセンス？”

5 よい道具を購入しても振り回してただけでは仕方がないように、道具の良し悪しにかかわらず赤子が論理思考するようになる何らかの条件があるのでしょうか？

“ある／ない／質問ナンセンス？”

6 赤子が、論理思考が人格化される、つまり言行一致の次元にまで高まるのには、言語による論理思考が出来ることに加えてさらに何かの条件があるのでしょうか？

“ある／ない／質問ナンセンス？”

7 言語による論理思考ができることと論理思考が人格化されることは同じことであって、つまり論理思考は人格化されつつできるようになるのでしょうか？

“そうだ／そうではない／質問ナンセンス？”

8 今日生まれた赤子全員を論理思考できるようにする国民的規模の大仕掛けはあるのでしょうか？ “ある／ない／質問ナンセンス？”

* 上記の1～8の質問を投じた。質問者もみずから答えよ、という要請に応じて下記を返答した。文中＜ ＞は、それまでに登場していた意見の部分引用である。

2003.02.18

わたしの考えを言います。意見は、このかた30年医師（少ないながら印欧語圏医師も）との現実医学診療のカンファレンスをしてきた人格経験に基づくものです。調査統計資料や学問的検討は別途調達してください。

1 日本語／印欧語の中へ投げ込まれた、先ほど生まれたばかりの赤子がこのさき論理思考することについて、日本語ならば一人もしないし、印欧語ならば全員がするのでしょうか？ “そうではない”

2 投げ込まれた言語に論理思考する使い勝手の良し悪しがあるのでしょうか？

“あるようだ”

3 言語の論理思考仕様に違いがあるとしても言語だけ抽出して（たとえば数学の数のように）使い勝手を考えることが出来るのでしょうか？ “できない”

4 仕様の如何にかかわらず論理思考する中に投げ込まれなければ赤子は論理思考をするようにならず、投げ込まれればするようになる、と言えるのでしょうか？

“言える”

5 道具の良し悪しにかかわらず赤子が論理思考するようになる何らかの条件があるのでしょうか？ “ある”

6 赤子が、論理思考が人格化される、つまり言行一致の次元にまで高まるのには、言語による論理思考が出来ることに加えてさらに何かの条件があるのでしょうか？

“ある”

7 言語による論理思考ができることと論理思考が人格化されることは同じことであって、つまり論理思考は人格化されつつできるようになるのでしょうか？

“そうだ”

医学上の検討であるカンファレンスの様相は、ずっと以前に「55・100・101」申したように国語の教習に成り果てることがしばしばありました。まさに、＜各人が日本語というものを母語として使い始める瞬間から、日本語的な思考形態によって、家族によって、社会の働きかけによって、その思考が形成されていく「5882」＞ののですから、＜個々の科学に特化した言語ではなく、あらゆる領域に浸透した言語なるものが、私たち個人と社会の思考形態と習慣を条件付けている「5859」＞のであり、＜全ての思考と表現と理解が自然言語で行われるからです。このような分野でこそ、普段から使っている言語、父祖伝来の言語、日常の思考習慣の性質がものを言います。2000年以上も前から合理的な思考と言語習慣を培ってきた言語文化と、たかだか100年前から自然科学を模倣して、法律を翻訳してきた程度の文化とでは、大きな違いがあるのです。合理性、理性的な思考とは、このような領域の話なので「5969」＞あって、＜本当の意味で論理が欠如しているのは、科学そのものにおいてではなく、科学も含めた社会的な営みの全てを組織的に考える能力としての論理です。科学は科学でも、自然科学とその応用に限定された科学ではなく、人文科学も含めた科学全体、学問の全体、教養の全体「5882」＞です。

8 今日生まれた赤子全員を論理思考できるようにする国民的規模の大仕掛けはあるのでしょうか？ “ない”

たしかに、＜英語で合理的思考を育て上げた人々は、決して英語だけを学んで育ったのではない「5970」＞し、＜どの言語が優れているかを議論するよりも、その

言語のどのような特性をもってより優れていると考える 「5965」>と、<日本語では、暗黙の了解（≒ルール。敬語のように、「場」に依存するものと考えていただきたい）が多く（まさにこれが日本語の複雑さを表象していると考えられる）、すなわち「暗黙の了解」は問われるものではない。結局そのロジックがどういうものか深くは考えない「5861」>という特性を持っているように感じます。

そこで、<論理的な思考と議論の欠如が日本文化の特徴であることは認めつつ、日本語という文化要因の分析には向かわない「5882」>わけにはいかず、<我々の文化も言語も様々な問題を含んでいますが、それを消し去るのではなく、良い物は残し、問題点を解決する方法を捜すことが必要「5963」>です。

言語による論理的思考が身についたところで、直ちにそれが人格化されていることと同じでないことを認めつつも、子供たちが論理的思考の見方で先行きのさまざまな人生的社会的出来事を経験する眼鏡として、子供たちの日本語による論理的思考の訓練は必要と思います。<明日から、我々はどんなアクションプランを作成し、具体的にどう行動すればいいのか「5883」>が私たちの課題です。

<「文法」教育というのは、もっと広範なものです。日本語にきちんとした文法がないということは、とりもなおさず、日本の教育の伝統に文法教育がないことを意味します。「日本語できちんと書く人」でさえ論理的に書けないことを意味し

「5844」>、<理路整然とした日本語なのか？そして理想的な日本語のモデルなのか？それをはっきり言わなければいけない、教育の場で定義して示し、子供たちの習慣にしなければならない「5973」>わけであって、<日本語の論理構成をきっちり定義して法律文や科学的記述をさせる国語教育を中等高等教育でやるべきだと「5922」>というくらいに。

わたしは、日本語による論理的国語教育（情操的ではなく）を目的とした幼少年期から中学生まで順を追って構成された教則本テキストが作成されることを願っています。個々の患者のカンファレンスで認めた論理思考の不具合は個々の医師によって振幅が大きいものでしたが、それでも積み重ねてゆく段階の多少のイメージを持ちました。ですから、算数数学に四則演算から微積分への教則本があるように、子供たちが論理的思考を習得する教本を日本語で作ることが出来るはず、と思いました。わたしには、言語、文法に関わることでですから美しく秩序化する力はありませんので、文系の方々に強くお願いいたします。

二十数年前に「にほんご」という国語の私家版がありましたが、日本語による論理的思考の訓練を目指したものではなかったようだとはいえ、そういう志の試みもあったのです。わたしの杞憂に過ぎないかもしれない懸念（内心はほんとうに）は、

父祖伝来の論理思考の希薄な日常の中になかにあって、子供たちが人格行動をともなわない屁理屈だけの人間になってしまうこと、精神のバランスを崩す者が出てくるかもしれないことですが、それでも、とくに文系の方々にお願い申し上げたく存じます。

＜境域（教育）は優れて社会的かつ歴史的な個人に対する働きかけです「5958」＞から。